

調和 = 神の創造と人間の試み

牧師 山本 護

旅をしても名所旧跡に行くことはないし観光地価格の名物も食べない。ただ街や路地を歩きまわり、昔ながらの食堂で地元めしを食い、カフェではない喫茶店でコーヒーを飲み、古本屋や骨董屋がひっそりあれば物知り店主の話聞く。観光資源とは無縁な、とりたてて注目されるところのない異郷の日常に、旅の詩情を覚えます。

八ヶ岳教会の集会所と萌え出る若芽、裏の林では山桜が慎ましく散り始め、その向こうでは田に水が入りました。自然と人間のなんという絶妙さか。意図も押しつけもないこんな調和の中に自分を放り出したい。旅先でもここでも、ほとんど同じような見方をするのは、無自覚ながら何かしらの調和を求めているせいかもしれません。



18世紀イタリアの哲学者 J.B. ヴィーコは言いました。「自然の世界

は神が創り給うたものなるがゆえに神によって認識されうる／歴史の世界は人間が創ったものなるがゆえに人間が認識しうる(新しき学問)」。歴史の産物たる建物や意匠ではなく、もちろん自然そのものでもなく、神がお創りになり、そこで人間が試みている調和にこそ感じ入る瞬間。ヴィーコだったらこれをどう定義するでしょうか。

「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから(詩編 121:1~2)」。神が創り給うた自然を、音声としての神讃美によって認識する。「山べにむかいて我／目をあぐ／助けはいずかたより／来たるか／あめつちの御神より／助けぞ我に來たる(讃美歌 301)」。

目を上げて八ヶ岳を仰ぐ。「いやあ、たいしたものだ」と感歎し、神を讃美する。それから視界を広くして、山麓の田畑や淡々と働くお百姓が目に入ると、つい「アーメン」という言葉がもれ、自分でも驚きました。

「歴史の世界は人間が創ったものなるがゆえに(ヴィーコ)」いつそう愛おしい。神の創造は量りがたいけれども、「あめつちの御神より助け(救い)ぞ我に來たる」ことを、人間が試みている八ヶ岳教会の片隅で、あっと感じました。Ω